



銅版画のプロセスそのものが面白い

プレス機「BEACON(ビーコン)」は、東京・亀有の渡辺製作所で譲ってもらった。小さい機械は版画家の駒井哲郎氏と中林忠良氏が設計した貴重なもの。

Information -

重野 克明 新作銅版画展 ダダダ、

●2021年1月20日(水)
→2月8日(月)
日本橋店本館6階 美術画廊X

▽ 高島屋の美術
▽ ART INFORMATION



しげの・かつあき 1975年千葉県生まれ。2003年東京藝術大学大学院修士課程美術研究科版画専攻修了。現在茨城県水戸市で制作。'04年77ギャラリー(銀座)にて個展。'11年から高島屋で定期的に個展を開く。'03年「第71回日本版画協会」展 日本版画協会賞など受賞多数。

ARTIST
CLIP

No.46



銅版画家
重野 克明
Katsuaki Shigeno



『行方』
(56.2×45.8cm エッチング、ドライポイント、エンブレーピング、雁皮紙)

たかが版画
だから版画

銅

版画を中心に、油彩、ドローイング、墨絵、陶芸など多彩な表現で高い評価を得ている重野克明さん。伺った自宅の居間の襖には墨絵、アトリエのある庭にも重野さんの陶芸作品が置かれている。

アトリエの壁にはたくさんさんの言葉が貼られている。「鳥が逃げる(アイデアが逃げないように、思いついた時に早く描く)」「やるべきことをたんだんと」など、詩の一節のよう。重野さんがつける展覧会名も、いつも印象的だ。

「それは自分を盛り上げるためでもありません。以前『版画の鬼と化す』とつけたのも、そこまで言ったら頑張るしかないから。今回は濁音でいきたいと思っていて、『ダダダ』に。リズムもあるし、やるしかないと鼓舞される感じなので」

壁には作品につながるような、たくさん

のスケッチも。作品のモチーフとして、人から聞いた話や、古本に書き込まれていた言葉からイメージを膨らませることもある。「自分の頭で考えることには限界があるんですよね。集めたメモを見ながら、意志が感じられるもの、ストーリーが感じられるものを選びます。銅版画は絵を描くようなつもりでは作らないというか、銅版にレリーフを作る、彫金作業をするような感覚です。できあがった銅版画にインクをのせて、プレス機で刷ると左右が逆転して、自分が思っていたのと少し違うものができる。そこが面白いところです。絵だと、どこで描くのをやめるか終わりが見えないのですが、銅版画は刷るところで区切りがつく気がするんです」

銅版を腐食させ、線を強くするかどうかは作品によって変えている。最近では銅版画の原点というべき「ビュラン」に惹かれているそう。銅版を直接彫っていく、紙幣の肖像画などに使われている古い技法だ。作品を刷るのは最上級の雁皮紙^{がんびし}。何十年も前に作られた、貴重な紙を使うこともある。

「版画は薄い紙に刷るものだから、あまり力んでもいけない。絵画のような強さは求めない。軽みがあることも大切で、そこが版画の良いところだと思います」